

巻 頭 言

善意と寛容の勧め

副代表幹事 内田 貞武

愛知県技術士会に入会して、早や 4 年半になる。

この間、幹事、副代表幹事、代表幹事、そして現在は理事を勤めさせて頂いている。

とても自分はその器にあらずと思っているが、諸先生の善意に支えられて何とかなっていると感謝している。

隔月に出席している本部の理事会では、日本技術士会と技術士のビジョンを明確にする「技術士ビジョン 2 1」の作成が急ピッチで進んでおり、この 6 月 23 日の本部総会で発表される予定となっている。

是非、本件に関する先生方のご意見も伺いたいものと思っている。

さて、愛知県技術士会の会員も約 1 5 0 名となり、徐々にではあるが、会の陣容も整い、例会やワーキンググループの活動も活発になっている。

これらの運営の大部分は 2 0 名の幹事と 3 名の顧問の先生方に献身に依っている。

とりわけ代表幹事と事務局の先生は大変な責務を負っている。

こうした先生方は前向き思考であるので、勢い様々な仕事が舞い込む。

技術士会でのボランティアも愛知県技術士会だけでなく、支部及び各部会でも重宝され、重要な役割を担って活躍をすることになる。

時間をやりくりして、熟してしまうことになるが、時たま、些細な手違いも生ずる。

しかし、時として手厳しい意見も出てくることもある。

こうした場合、技術士会の活動はボランティアとは言え、担当と決まったことはきちっとやり遂げることは当然であるが、一方、ちょっとした手違いについては、周りには寛容をもって対応すべきではなかろうか。

技術士会は、前向きな善意に依って成り立っていると同時に、お互いの敬意と寛容の精神をもって、緩やかな輪を形成していくものである。

会員全員が、単に会から与えられる立場との意識だけでなく、前向きな善意を発揮し会に何らかの貢献をするとの気概を持ち、そして会の運営に寛容な態度で臨めば、愛知県技術士の活動は必ず活性化するはずである。

以上

「広場・湖海の土」 No.23

天の極地だより(1)

西脇 正倫(建設部門)

中部技術士会有志による訪中も、去年の SARS 騒ぎによる中断はあったものの、すでに3回を数え、定例化しつつある。訪中の柱は西安建設科技大学研究者との交流、建設・環境部門の大学生とのディスカッションやレクチャー、付属小学校での環境授業実施である。そしてこれに加えて、中国各地の視察・見学・観光を一方の柱とする。

一去年は敦煌の林野庁相当部局の行政官との交流を行い、沙漠化を食い止めようとする具体的な取り組みについての知見を得ることができた。そして今年は、世界の辺境ともいえるチベット自治区の訪問が目玉である。今回の中国訪問については、いずれ技術士会にも詳細な情報提供を行う予定なので、今回は、チベット訪問について部分的な速報をお届けしようとするものである。

我々の企画は四川省の成都からチベット自治区の首都ラサに入り、ラサを起点にチベット第二の都市シガチェを一方の端とする山岳ルートをチャーターした小型バスで巡るもので、2日間で約700kmを走破した。途中、最高標高は5,259mのションガ・ラ峠である。天に触れるかと思えるその辺りは、すでに僻地ではなく極地ともいえる荒涼たる天地であり、我々の大半は酸素ボンベに頼らざるをえなかったのに、天の極地ともいえるかの地にも放牧を中心とする人々の生活があった。現在、その天の極地と低地をつなぐ道路整備が進められており、今回の道中はそのままに現場を走り抜けるものとなった。

二日目、「トルコ石の湖」との異名をもつヤムドク湖を眼下にみる崖縁の舗装路を、上下・前後・左右に大きく揺さぶられながら行く。発破現場に遭遇したり、ぬかるみにはまった工事車両を全員で押したりと、ちょっとした探検ともいえるものとなった。そして垣間見た工事の水準そのものは、我々、技術士にとって、正直なところ「首をかしげる」どころではないものだったのである。

しかし、いくつもの「？」を重ねるうちに、思っていたことが実はあった。それは「技術の行く末の多様性」とでも表現したらよいのであろうか、つまりかの地の道路整備技術の体系が、日本に置き換えれば数十年は「遅れている」ことは間違いないものの、彼らの技術の行く末は、わが国の技術発展の同軸上には必ずしもないのではないかと、あるいはそのように想定して発展を進める必要は、必ずしもないのではないかという直観である。

この点について、同行の氏と議論を重ね、以降、ご報告できたらと考えつつ、途中ながら筆をおくこととする。

以上

会 員 投 稿

図書の刊行に際し思うこと

技術士（電気電子部門） 杉本利夫

この程半世紀前の研究成果を企業の許可を得て刊行（B5 80頁）した。内容は肉厚セラミックスの乾燥研究で、乾燥時間、消費エネルギー、設備面積をそれぞれ蒸気乾燥の約半分以下にし得ることなどで、企業では今も実用されている。

私が公にしたかった想いは、世界に類を見ない研究であるためである。ところが、企業では、自社ノウハウと考えてか、公にしないよう要望された。このために、名称、図、文章などの多くを割愛してやっと出版できた。

本書を見た方々から、安価な装置で、実用効果が大きいとして、開発の労苦をねぎらう過分なお言葉を戴いた。また、各種予想外の業務展開にも及んだ。

それにしても、50年以前の研究に対し、退社後20年余経過した元従業員の行動が、昔の勤務先に束縛されるかと思うと、社会の不合理的を感じる。

私は、図書の発行に先立ち、技術者の倫理として企業の校閲を依頼したが、企業から刊行を反対されるなど意外に感じた。

一方、企業の立場では、企業の重要な情報として、外部流出を避けたいと考える経営上の配慮は当然とも考えられる。しかし、開発後の時の流れも考慮すれば、当然公にされることの対策をされるべきことと考えられる。

このように、技術者が図書発行に際して嫌な束縛を受けるのは、企業で挙げた成果を経験された多くの技術士会員が同感されると考える。これは、個人を全く無視（使い捨て）した企業の制度によるものと腹立たしささえ覚える。

日亜中村氏の裁判のように、過去の成果に対し適當時期に、適正評価をして、報酬を払う社会制度にしたいものと考えられる。終身雇用時代は変り、人も高齢化時代の今

日、企業内で得た知識、技術は、それ以後に発展する可能性もある。

知的財産が重要視される今日、企業と元従業員間の評価見直しと、適正の報酬を払う制度が企業内に必要になったと考えられる。技術士の皆さんのお考えを教えてください。

以上

お知らせコーナー

● 愛知県技術士会 第16回「研究発表会」のご案内

日 時 : 平成16年6月19日(土) 13:30~16:20
(受付開始 13:00)

場 所 : 名古屋国際センタービル 3階 第1研修室

発表テーマと講演者

代表幹事開会挨拶 13:30~13:35

(1) 講演1 (13:40~14:25)

「エアコンの技術動向—代替冷媒化,省エネから空気清浄技術
(マイナスイオン,アレルゲン不活化フィルタ)などについて」

小島 晋 氏 (三菱重工(株)・名古屋研究所) [機械部門]

(2) 講演2 (14:30~15:15)

「環境基本計画策定における住民参加について」

平松 明子 氏 (中外テクノス(株)・技術部) [環境部門]

休憩 (15:15~15:30)

(3) 講演3 (15:30~16:15)

「琵琶湖から学んだもの」

伊藤 久 氏 (株) ツルタ設計 [水道部門]

副代表幹事閉会挨拶 16:15~16:20

参加費(資料代含む): 1,000円(非会員 2,000円) (当日会場でお支払い下さい)

申込み : E-mailまたはFaxにて、6月11日(金)までに、下記中部支部事務局(松田)まで連絡願います。

E-Mail: g-chubu@asahi-net.email.ne.jp

Fax : 052-533-1305

当日、受講証明書を交付します。

愛知県技術士会 平成16年度 第1回例会参加申込書(FAX用)

氏 名		部 門	
事務所名又は会社名			

[愛知県技術士会会報の情報連絡先]

代表幹事 柴田素伸 〒492-8485 稲沢市中之庄町行燈18-86
TEL・FAX 0587-32-4758 E-mail: shibata-m@mvc.biglobe.ne.jp

● 愛知県技術士会会員の異動

新入会 (3 名)

片 桐 正 己 (建設 / 農業)

野々部 顕治 (衛生工学)

丸 山 文 雄 (環境 ただし技術士補未登録)

退会 (2 名)

宇佐美 雅仁 (建設)

森 下 正 三 (電気電子)

● 編集後記

すでに 6 月、全国的に梅雨ですね。チベットの地も乾季が終わり、日中は黒ずんで見えるほどの青空も、午後には曇りがちとなり、毎夜、短く激しい雨が降っています。そのため、かの地では一度も星空を見ることが叶いませんでした。しかしその雨が大地に緑と実りをもたらすのです。

天の極地たるチベットでは、ヤクの放牧と裸麦の栽培が伝統。そしてその伝統は悲しいほどの美しさをもって今も受け継がれています。そこには過酷ながら完成された循環型社会が持続しているように見受けられます。

今、着々と進められている開発事業は、彼らに何を与え何を奪うのでしょうか。はにかみながら私たちを見つめていた、天の極地の少女を思い出しながらの自問自答に、今は答えが見つかりません。

自問自答といえど私も事務局を拝命して 2 年が過ぎました。総会では CPU 証明書の誤植という大きなミスをしでかしました。本誌を私的な謝罪に用いることは控えさせていただきますが、総会前後の展開のなかで、正直なところ、事務局とは、会の運営とは何であるかと自問自答を試みてきました。その答えは内田先生の巻頭言にあるがまま。それもわからぬまま、受動的な活動に終始してきた不明を恥じるばかりです。

あらためて相互信頼の重要性をかみしめつつ、その具体化を進めてまいりますので今後とも叱咤ご鞭撻をお願いいたします。

(編集委員 : 西脇)